印度學佛教學研究第五十四巻第一号　平成十七年十二月

『鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事』と『津戸の三郎入道へつかはす御返事』（九月十八日）とについて

角野玄樹

『鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事』（以下『禅尼宛消息』）と『津戸の三郎入道へつかはす御返事』（九月十八日）（以下『津戸宛消息』）とは、文が似通っている。この両者は、どちらかが先に成立し、どちらかが、それを参考にしてのちに作成されたものか、あるいは、原初形態が同じ系統のもので、そこから派生したものと考えられる。これまでの研究として、梶村昇氏は、「津戸宛『九月十八日付消息』—付・鎌倉の二位の禅尼への消息—」（『浄土宗学研究』第二十号　平成六年三月）の中で、これらの文を比較対照し、検討を加えておられる。しかし、梶村氏の論文を含め、従来の先学の研究では、『禅尼宛消息』と『津戸宛消息』と、どちらが原初形態に近いか、あるいは、どちらが先に成立したかは、あまり明確に論じられていなかったと思われる。

そこで本稿では、『禅尼宛消息』と『津戸宛消息』とでは、どちらが原初形態に近いか、どちらが先に成立したかを検討したいと思う。この結論を先にいえば、『津戸宛消息』→『禅尼宛消息』の順であろうと思われる。あるいは、『津戸宛消息』のほうが、原初形態により近いと思われる。そして、のちに成立した『禅尼宛消息』は、少なくとも法然とは違う、『津戸宛消息』の作者ではない別人が作成したという推論も提示したい。

これにより、法然文献研究の一端を示したい。

両消息を比較し、『禅尼宛消息』に疑問点があることを指摘していく。なお、両者のテキストとして、最古本の『西方指南抄』所収のものと、元亨版『和語灯録』所収のものを本稿では主に扱うこととする。

『禅尼宛消息』の元亨版の次の文を見てみよう。

さては、念仏の功徳は、仏もときつくしかたしとの給へり。又智恵第一の舎利弗・多聞第一の阿難も、念仏の功徳は、しりかたしとの給ひし広大善根にて候へは、まして源空なんとは、申つくすへくも候はす。源空、この朝にわたりて候聖教を随分にひらき見候へとも、浄土の教文は、この朝にわたらすとかんかへ候て、わ

つかに震旦よりとりわたして候聖教の心をたにも、一年・二年なんとには、申つくすへくもおほへ候はす。さりなからも、おほせかふりて候へは、申のへ候へし。(1)

ここでは、念仏の功徳は、広大で、申しつくすことができない。浄土の教文は、日本に伝わっていないと思われるので、わずかに中国より運んだ聖教の趣旨は、一、二年では申しつくせない。そうではあるが、質問を受けましたので、申しあげます、と述べている。しかし、『禅尼宛消息』では、これ以降、申しつくせないという念仏の功徳をほとんど説いていない。もちろん、念仏についての説示はあるが、しかし、念仏の功徳については、ほとんど説かれていない。

また、一、二年では申しつくせないという聖教も、『禅尼宛消息』において引用しているのは、善導『法事讃』の文のみの一度きりで、先の引用文のニュアンスと開きがあるように思われる。すなわち、前置きのわりに、念仏の功徳も聖教の趣旨も、ほとんど説いていないのである。一方、『津戸宛消息』では、このような文は存在しない。このように、『禅尼宛消息』の独自の文に、疑問点があるということである。『禅尼宛消息』の先の引用の独自の文は、最初からあった文ではなく、のちに付加してしまったのだろう。このため、このような矛盾が生じたと思われる。

次に、『禅尼宛消息』の文で、先の引用文の傍線部Aに関してである。このあたりの趣旨は、浄土の教文は、この日本に渡っていないと思われるので、わずかに中国から運んだ聖教云々、とある。しかし、意味がよくわからない。浄土の教文は、浄土三部経をはじめ、数々の文献が、法然以前より日本に伝わっている。なのになぜ、わずかしか伝わっていないというのだろうか。この点も疑問といわざるをえない。

次に、両消息の文の一部を比較してみよう。まず『禅尼宛消息』の『西方指南抄』所収本である。

ソノユヘハ、念仏ノ行ハ、モトヨリ有智・無智ヲエラハス、弥陀ノムカシノチカヒタマヒシ大願ハ、アマネク一切衆生ノタメ也。無智ノタメニハ、念仏ヲ願トシ、有智ノタメニハ、余行ヲ願トシタマフ事ナシ。十方世界ノ衆生ノタメナリ。有智・无智、善人・悪人、持戒・破戒、貴賤、男女モヘタテス、モトハ仏ノ在世ノ衆生、モシハ仏ノ滅後ノ衆生、モシハ釈迦末法万年ノノチニ、三宝、ミナウセテノ、チノ衆生マテ、タヽ念仏ハカリコソ、現当ノ祈祷トハナリ候へ。(2)

そして、『津戸宛消息』であるが、『禅尼宛消息』と比べ、該当部分は、だいたい同じ内容だが、注目したい異同がある。『禅尼宛消息』の傍線部Bに該当する『津戸宛消息』では、

ミナコモリタル也。(3)

となっている点である。傍線部Bの文だと、流れが悪いように思われる。すなわち、両消息のこのあたりの趣旨は、念仏

の教えは、有智・無智に関係がない。阿弥陀仏の本願は、一切衆生のためのものである、と述べ、そして、その衆生の例として、「有智・无智、善人・悪人、…」とあげていくのである。その文の締めくくりに傍線部Bと傍線部Cがくるのである。『津戸宛消息』の傍線部Cのほうは、あげられている様々な衆生たちは、阿弥陀仏の本願の対象に「ミナコモリタル也。」と、前の文を承けて流れがよい。しかし、傍線部Bのほうは、阿弥陀仏の本願の対象としてあげられているこれらの衆生にとって、「タ、念仏ハカリコソ、現当ノ祈祷トハナリ候へ。」というのでは、傍線部Bが、唐突であり、『津戸宛消息』と比べ、明らかに流れがおかしい。この傍線部Bの念仏の現当の祈祷の内容は、この文より以前には、全く現れず、関連する文も見られず、突飛といわざるをえない。この念仏の現当の祈祷について、このあとの『禅尼宛消息』の末尾のほうで

カナラス専修ノ念仏ハ、現当ノイノリトナリ候也。(4)

とある。また、この文ののちに、祈りについて出る。しかし、これらとても、密接に傍線部Bと関わりがあるわけでもないようで、何度もいうように、傍線部Bは、違和感があり、原初形態が、このような文であったとは考えにくい。

よって、これらの消息の原初形態により近いのは、『津戸宛消息』の傍線部Cであり、『禅尼宛消息』の傍線部Bは、のちに改変され、そのため、このような違和感を覚えるような文になってしまったのだろう。

次に、以下にあげる文を検討する。まず、『西方指南抄』所収『禅尼宛消息』の文である。

一。人〳〵ノ堂ヲツクリ、仏ヲツクリ、経ヲカキ、僧ヲ供養セム事ハ、コ、ロミタレスシテ、慈悲ヲオコシテ、カクノコトキノ雑善根オハ修セサセタマヘト御ス、□候へシ。(5)

これに対し、該当する『西方指南抄』所収『津戸宛消息』の文は、以下のとおりである。

人〳〵ノアルイハ堂オモツクリ、仏オモツクリ、経オモカキ、僧オモ供養セムニハ、チカラヲクワヘ、縁ヲムスハムカ、念仏ヲサマタケ、専修ヲサフルホトノ事ハ、候マシ。(6)

この二つの文を見ると、傍線部の前半の文が似ているが、後半から異なる文となっている。句点がくるまでの文の全くの途中から違っているということである。このように、一文の途中から、全く異なる文に変えていくのは、別人によって、どちらかが作成されたことのように思わせるのである。すなわち、ここでの『禅尼宛消息』と『津戸宛消息』とでは、いいたい内容が異なるわけであるが、たまたま傍線部の前半は、同じ文でも意味がとおるというのは、偶然にしては出来すぎのように思われる。

しかも、両消息のここでの「人〳〵」は、違う人々を指している。『津戸宛消息』のほうの「人〳〵」は、これより前に

出る「一家ノ人〳〵」[7]と予想できるが、『禅尼宛消息』のほうは、これより前に出る「異解ノ人〳〵」[8]か、それとは違う「人〳〵」かは不明だが、少なくとも「一家ノ人〳〵」ではないことは明らかである。違う「人〳〵」に対することなのに、傍線部の前半の文が、偶然に一致するということが、当時の実際の状況であったのだろうか。ここでの両消息の異同は、先に成立した消息とは別の作者が、前半の文は、ほぼそのままにし、ある意図のもとに、後半の文を作り変えたと見るのが妥当であろう。同じ作者が、趣旨や「人〳〵」の意味を変えたのに、前半の文は、そのままにしたというのは、想定しがたい。

1 『龍谷大学善本叢書十五　黒谷上人語灯録（和語）』一八一頁。『昭法全』五二七頁。句読点や並列点は、筆者が付した。なお、最古本の『西方指南抄』所収本では、元亨版と比べ一部欠けている文があるので、ここでは元亨版を用いた。

2 『親鸞聖人真蹟集成』五巻四六九～四七一頁。『昭法全』五二七～八頁。なお、左訓は省いている。

3 『親鸞聖人真蹟集成』六巻八九四～五頁。『昭法全』五〇一頁。

4 『親鸞聖人真蹟集成』五巻四九四頁。『昭法全』五三二頁。

5 『親鸞聖人真蹟集成』五巻四八三～四頁。『昭法全』五三〇頁。

6 『親鸞聖人真蹟集成』六巻九〇五～六頁。『昭法全』五〇三～四頁。

7 『親鸞聖人真蹟集成』六巻九〇四頁。『昭法全』五〇三頁。

8 『親鸞聖人真蹟集成』五巻四八二頁。『昭法全』五三〇頁。

〈キーワード〉法然、鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事、津戸の三郎入道へつかはす御返事（九月十八日）

（佛教大学研究員）

『鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事』と『津戸の三郎入道へつかはす御返事』（九月十八日）とについて（角　野）

nō-soku-bodai-gi, he used Kūkai's classification from *The Ten Stages of the Development of Mind* (*Jūjūshinron*) to analyze and rank *bonnō-soku-bodai* in ten stages. He insisted that each stage be considered carefully and that *bonnō-soku-bodai* be accurately understood according to the Shingon School's teachings. Yūkai's fundamental interpretation of *bonnō-soku-bodai* was based on Kūkai's philosophy and then further developed.

35. Hōnen's View of Human Beings: A description of the "Notion of Threefold Mind"

Sadataka ICHIKAWA

The "Notion of Threefold Mind" is a sermon in the Daigobon *Hōnen Shōnin Denki*. But this sermon has many problems, and there is the debate whether it is Hōnen's own sermon or not. Here I propose a new position.

The "Notion of Threefold Mind" has 27 articles. But some articles contradict each other. The first article has been expressed from the position that the Threefold Mind is given from Amida Buddha. However, the third has been expressed from the position that the Threefold mind is the mind which sentient beings should possess.

In the "Ryaku-senchaku" (summary) of the *Senchakushu*, Hōnen has taught that sentient beings have the ability for the desire to escape from the cycle of birth-and-death. So the first article seems not to be Hōnen's thought.

Also the fourth and fourteenth articles are described from a different idea. The fourth's thought differs from Hōnen's view of a human being.

From such a viewpoint I suggest that the "Notion of the Threefold Mind"is not a sermon by Hōnen, but that it was compiled from memorandums (of Genchi, Hōnen's disciple), either of Hōnen's sermon or of ideas other than Hōnen's.

36. "The Answer to the Kamakura Second Degree Zen Nun" and "The Answer to Tsunoto no Saburo Entering the Way"(on September 18)

Haruki KADONO

It is said that "The Answer to the Kamakura Second Degree Zen Nun"(hereafter (1)) and "The Answer to Tsunoto no Saburo Entering the Way" (on September 18) (hereafter (2)) were written by Hōnen-bo Genkū. Because there are some similar sentences in them, it seems that one preceded the other.

The purpose of this paper is to examine which one was written first. I conclude that (2) was written first, then (1) was written relying on (2) by a later and different writer.

Having compared the contents of two letters, I have found that some sentences in (1) are out of context with (2). I have also found that some of the first half of each sentence are extremely similar, while the corresponding second halves are completely different. Therefore, I suppose that these two letters were written by different writers.

37. Zonkaku and the *Hōonki*

Kyoko TATSUGUCHI

Zonkaku (1290–1373) was the fourth generation descendant of Shinran, the founder of the Jōdoshin school of Japanese Buddhism. He traveled throughout Japan with his father Kakunyo, and wrote many books to spread Shinran's doctrine.

This paper will analyze his reason for writing the *Hōonki*. Zonkaku believed that filial piety in Buddhism is better than filial piety in Confucianism. In Confucianism filial piety brings happiness in this life, but in Buddhism filial piety brings happiness in both this life and the life to come. Nembutsu is the best expression of filial piety.

38. The Change of Time in Shinran's Thought: from the moment of death to the present life

Mikio TAKEDA

In my paper I wish to discuss Shinran's idea of the change of time. Shinran